シリア、その戦禍を生き抜く女性たち

安田 菜津紀

2018年春、およそ8年ぶりにシリアの地を訪れた。シリア北東部は実質、クルド人による自治区となっている。「ロジャヴァ」と呼ばれるこの地では、男女平等がうたわれ、イスラム教徒が多くを占める街の中でもスカーフを被らず歩く女性たちの姿が目立つ。ただこの「平等」とは、男も女も等しく戦闘に貢献せよ、ということと地続きだった。

ISとの戦闘で果敢に前線へと向かう女性兵士たちの姿は、広く世界中で報じられた。その爪痕が瓦礫や不発弾として街中に食い込んだままのうちに、今度は今年1月、トルコがクルド勢力へ越境攻撃を展開し始めたのだ。この戦いの中で、女性兵士の遺体が凌辱される動画がネット上に流出し、ロジャヴァ内だけではなく、クルド人たちの間に抑えようのない怒りが、またたく間に広がっていった。

直接的に戦闘に駆り出されなかったとしても、女性たちの立場はなお厳しい。避難生活を送る人々の中では、若い娘を独身でいさせることによって人身売買の標的となるのではと危惧したり、あるいは他の家に嫁がせることによって家族の経済的負担を減らそうとしたり、女性の結婚を早めてしまう傾向にある。私も、シリアからの難民で15歳で結婚、流産し、16歳で出産した女性と出会ったことがある。児童婚の問題は各NGOでも深刻な問題として対応に追われていた。身体的なリスクだけではなく、教育を受けられる年齢のときにその機会を奪われることによって、貧困につながる可能性もあるからだ。

ここまで書くと、女性がいかにも庇護されるだけの存在に思えるかもしれない。けれどもこうした非常時の生活を支えていたのもまた、女性たちの力だった。砲撃の音が鳴りやまない避難所の中でも、女性たちはせっせとパンをつくり、くじけそうな男性たちの肩を叩き励ましていた。

ただ、これだけは言わなければならない。彼女たちの力というのは本来戦禍ではなく、安心安全が守られた場で発揮されるべきもののはずだ。

PROFILE

やすだなつき：1987年生まれ。studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。「HIVと共に生まれる―ウガンダのエイズ孤児たち―」で第8回名取洋之助写真賞受賞。『それでも、海へ―陸前高田に生きる』（ポプラ社，2016）、『写真で伝える仕事―世界の子どもたちと向き合って』（日本写真企画, 2017）など著書多数。